

パウロの回心は、イエス派を迫害していたパウロが神さまによって突然回心させられたという出来事です。この出来事は使 9:1～9 に記されています。天からの光に照らされて地に倒れたパウロは、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」という声を聞きました。彼は、その人に向かって、「あなたはどなたですか」と問うたのです。その問いに、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」という答えがありました。二人の間に「あなたとわたし」という関係が生まれ、パウロがイエスを迫害していたことが示されたのです。使 26:16～18 によれば、パウロは復活のキリストによって使徒として異邦人伝道を委託されたのです。

では、パウロ自身は、この回心の出来事をどのように記しているのでしょうか。それはガラ 1:11～17 に記されています。13 節で、イエス派の信仰共同体を「神の教会」と言い、迫害していたのが、実はその創設者である神さまを迫害していたことなのだと思います。申命記には、「木にかけられた者は、神に呪われた者である」と記されています。パウロにとって呪うべき存在である十字架で殺されたイエスをキリストであると主張していることに対する反感と怒りが、彼をイエス派の迫害へと向かわせた主な要因だったと思われます。そして、回心とそれに伴う召命が、神さまの意志によって起きたのです。16 節の「御子をわたしに示して」、直訳は「わたしのうちに啓示された時」という言葉は、イエスがパウロの内に入り込んで来て、彼の内で生き始めたことを示唆しています。ガラ 2:19～20 によると、回心の出来事は、彼自身が死んだままで、十字架のイエスが彼の中に生き、彼は十字架のイエスが働く場になっている、という強烈な体験だったのではないかと思います。

パウロは迫害したイエス派の人たちの語る言葉により、イエスのこと、イエスの受難、十字架の死と復活などが無意識のうちに彼の中に蓄積されていったのではないかと思います。そして、彼らの話の中に、パウロの胸に突き刺さるものもあったのではないのでしょうか。そのような思いが、ダマスコ途上のある時に、突然、パウロの心の中で、神さまの啓示という形で現れたのではないかと思います。パウロが信頼する神さまは、回心の前後でもいささかも変らない同じ神さまなのです。このように考えますと、神さまを信頼し、人一倍熱心なユダヤ教徒として生きていたパウロが、同じ神さまからの「福音として御子を異邦人に告げ知らせるように」との言葉によって、イエスの十字架の死と復活の福音を異邦人に伝える宣教に励み、様々な迫害にも耐えて、三度に亘る宣教旅行を行ったことが理解できるのです。